九月五雲会

九月十九日（土）
午後十二時始

12:00

呉服

シテ ツレ 和久荘太郎 辰巳大二郎
ワキ 大日方　寛
ワキツレ 野口能弘 〃 野口琢弘
間 若松　隆
後見 宝生和英 水上　優 金野泰大
地謡 金森隆晋 野月聡亘 高橋玄宜 佐野哲也 木谷
大鼓 柿原孝則
小鼓 飯冨孔明
太鼓 大川典良
笛 杉信太朗

13:20

呼声

山本泰太郎
山本則孝
山本凜太郎

〈休憩十五分〉

13:50

藤栄

シテ 小倉伸二郎
子方 稲田海音
鳴尾 高橋憲正
立衆 澤田宏司 〃 藪克徳 〃 内藤飛能 〃 金森良充
ワキ 福王和幸
ワキツレ 福王知登
間 山本則重 山本則秀
後見 今井泰行 亀井雄二
地謡 上野能寛 当山淳司 大友順 大輔 朝倉航己 鶴田
大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 森貴史
太鼓 小寺真佐人
笛 藤田貴寛

15:10

殺生石

シテ 小林晋也
ワキ 御厨誠吾
間 山本凜太郎
後見 佐野登 川瀬隆士 辰巳和磨 金井賢郎
地謡 田崎甫 佐野弘宜 山内崇生 東川尚史 石黒空
大鼓 原岡一之
小鼓 坂田正博
太鼓 澤田晃良
笛 栗林祐輔

〈休憩十五分〉

終演予定　十六時十分頃

演目の解説

能「呉服」（くれは）

時の帝に仕える臣下が、摂州住吉神社に参詣の帰り、呉服の里を通りかかると、唐風の装いをした二人の女性が機を織っています。機を織っているのが呉織（くれはとり）、糸を引いているのが漢織（あやはとり）と名乗り、方は天皇の御代に日本に織物などを伝えた臣下事なども尋ねると、このめでたき御代がなおに錦の機物を捧げましょうと言って消えに失せ、夜になると呉織が美しい舞姫となって現れ、舞を舞います

狂言「呼声」（よびごえ）

太郎冠者の無断欠勤に怒った主人は、次郎冠者を供に連れて、太郎冠者の家に乗り込みます。調子のよい太郎冠者は、さりげなく手で居留守を使いますます。太郎冠者を叱りに行ったはずの主人、しかし「平家節」「小唄節」「踊り節」などを太郎冠者が次々繰り出す楽しいメロディとリズムについ引き込まれ、怒りも忘れ夢中になって三人で浮かれてしまうのです。謡の芸づくしの応酬で舞台は広がり、思わぬ展開をむかえます。

能「藤栄」（とうえい）

最明寺時頼は旅の僧に身をやつして諸国を巡っていました。摂津の芦屋で一夜の宿を借り、月若という前領主の子が伯父の藤栄に領地を奪われ、零落している事を聞き、家の者から重書を預かると、次の日一緒に藤栄の領地に出掛けます。鳴尾の何某と浦遊びに興じ、酒を飲み、舞を舞ったりしています。藤栄に声を掛けると、八撥を所望します。藤栄が舞の最後に僧に詰め寄ると時頼は正体を明かして藤栄を懲らし、月若の本領を安堵します。

能「殺生石」（せっしょうせき）

那須野を通りかかった玄翁という僧は、石の上を飛ぶ鳥がふらふらと落ちるのを見て不審に思っていると、「その石のそばに立ち寄るな」と言いながらに女が現れます。女はその石は「殺生石」と言って、帝の側にいて王朝を傾けようとした「玉藻の前」という狐の精が、安倍泰成に正体を見破られ、この飛んできて石と化った謂れを語ります。女が石の陰に消え失せ、玄翁が石に向かって祈ると狐の本体が現れ、三浦、上総の両介に退治された有様を見せます。